

太宰治『俗天使』論：「捏造」された手紙の問題

櫻田，俊子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

69

(開始ページ / Start Page)

44

(終了ページ / End Page)

51

(発行年 / Year)

2004-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010088>

太宰治『俗天使』論

——「捏造」された手紙の問題

はじめに

『女生徒』（昭和十四年）に、素材となった一読者有明淑（通称淑子）の日記が存在する事は、津島美知子によって、昭和二十三年に言及されていたが、日記は非公開とされてきたため、作品と素材日記の関係は長い間わからなかった。しかし、平成十二年、津島美知子より日記を寄託されていた青森県近代文学館によって、日記が公開され詳細が明らかとなった。

このたび、私は、『女生徒』と日記と比較し精査してみた結果、『女生徒』は、モチーフ、表現とも、大部分が有明日記に依拠し、ほぼそのままの形で引用されている部分もあることが判明した。しかし、文体と内容の再構成によって、『女生徒』は、一つの独立した作品として評価出来ると私は判断する。太宰の改変による、列挙、体言止め、読点の多用といった表現

櫻田 俊子

によって、揺れ動く語り手「私」と、その意識の移り変わりのめまぐるしさが強調された。また、内容においては、約三ヶ月分の日記から取捨選択し、一日の出来事に再構成された。有明日記から採ったエピソードと太宰が創作し加えたエピソードとは、作品中で見事に調和し、『女生徒』の夢想、揺れ動く心情、思春期の不安定さが強化されている。『女生徒』は、有明淑という「女生徒」の日記に、太宰が日記から受けたイメージと、太宰の「女生徒」観が付加された作品だと私は考える。

この『女生徒』の素材となった日記の作者、ある意味で『女生徒』のモデルともいえる有明淑が、太宰の他の作品にも影響を与えている。それが『俗天使』（昭和十五年）だ。『俗天使』には、太宰宛てに送られた有明淑の手紙が取り入れられている。このことは、前掲の津島美知子の『女生徒』成立事情の言及中に指摘があったが、これまで『俗天使』の先行研究では、この事実は、ほとんど取り上げられてこなかった。本稿は、こ

の点を照射し、『俗天使』を考察するものである。

一 手紙の主 有明淑

先に述べたとおり、『俗天使』と有明淑の関わりは、昭和二十三年に、津島美知子が、

「俗天使」のおしまひの手紙の主は、「女生徒」のS子さんである。

（『太宰治全集 第四巻』「付録」 八雲書店 昭和二十三年）

と言及している。相馬正一は、「津島美知子の語るところによれば、『俗天使』（昭和十五年一月『新潮』）は、一部の人物の呼称をのぞくとほぼ淑子の原文のままであるという。」と述べている。津島美知子は、後にも「その後S子さんから届いた手紙（太宰が『俗天使』に取り入れた手紙）」（『太宰治全集 第三巻』「月報」昭和五十年）と述べており、有明淑の手紙は、そのまま引用、或いはほぼ引用に近い状態で、作品に取り入れられたと判断してよいのではないだろうか。

『俗天使』の手紙部分と、有明淑の日記を比較してみると、表記揺れやエピソード、登場する人物の共通性などが見られる。具体的にいくつか示すと、作品中「淋し」と「寂しい」の混用が起こっているが、有明日記でも同様の混用がある。『女生徒』でも同様に混用されている。手紙中の「銀座のローヤル」は、有明日記の六月二日に「学校の帰へりローヤルに

行つて靴を買ふ。」との記述があり、手紙中においても、銀座ローヤルで購入したことになっている。靴に関する叙述は、有明自身が既に発表された『女生徒』を意識して、わざと、後日談『女生徒』以後の報告として、書いたものであるかもしれない。また、「お寺さん」と呼ばれる友人も、有明日記に「お寺さん」との記述がある。『女生徒』には、「お寺のキン子」さんとして登場している。手紙と有明日記にみられる、表記揺れ、エピソード、登場人物の共通性からも、手紙部分は、有明によるものだと思われる。

また、手紙の主から、「サビガリさん。」と呼ばれるが、「サビガリ」とは津軽地方の方言で、「寒がり」を意味する語であり、『女生徒』以後、太宰と交流があつた有明が、この言葉を太宰から知った可能性がある。

太宰が、有明から、手紙を受け取つてから作品中に引用するまでを辿つてみると、作中手紙に、「けふ夕方、お母さんが『女生徒』を読みたいとおつしやいました。」とあるから、『女生徒』発表の、昭和十四年四月から、『俗天使』の発表、昭和十五年一月までの、約九ヶ月の間に、太宰は有明淑から手紙を受け取り、『俗天使』作品中に引用したと考えられる。

次に、取り入れられた手紙の内容を考察する。

二 手紙に描かれた『女生徒』後の「女生徒」

まず手紙は、呼びかけから始まる。手紙の「私」は、冒頭からの語り手の「私」に向かつて「をちさん、サビガリさん。」

と呼びかける。「私」からみた、「をぢさん」は、「毎日毎日チクチク小説ばかり書いて」「いつもドテラ着て家に居る人間」で「運動の明るさと、元気を必要と」する。この呼びかけから、手紙が送られてきた相手が、冒頭からの語り手の小説家「私」であることが読者には判断される。語り手「私」の状況が、手紙の「私」を通して語られる。それまで、一人称で、内的な視点で語られていた語り手の「私」が、手紙の「私」によって、外的な視点から読者に示される。

「けふも、またをぢさんを、うんと笑はせてあげます。」と手紙の主が語るのは、『女生徒』のその後だと思われる内容だ。『女生徒』を既に読んでいる読者には、手紙の「私」が『女生徒』の「私」と同一人物であることがすぐに想起されるであろう。手紙に書かれるのは、靴を買ったこと、「お寺さん」と買い物に行ったことなど、自身の日常である。語り手「私」の言説は、『女生徒』の「私」と同様に、話題が飛躍し、「私」の意識はめまぐるしく移り変わっていく。しかし、『女生徒』の「私」と決定的に違うのは、手紙の送り手の「をぢさん」に何度も「つまらない？」と質問する点である。

『女生徒』中には、「お父さん」や「あなた」に呼びかける場面が見られた。しかし、その呼びかけは、返事を期待していない、独白のようなものであった。一方『俗天使』の、手紙の「私」は、どの話題に対して、「つまらない？」「だめだわね」と「をぢさん」に念を押す。手紙の「私」は、もう『女生徒』に描かれたような「女生徒」ではない。そこに表出するのは、相手の反応を気にする、のびのびとしなくなってしまうた

元「女生徒」の姿である。もはや、手紙の送り主、「私のこと」を『女生徒』に「上手に書いて下さつ」た小説家「をぢさん」の反応を見て、逆に『女生徒』に描かれるような「女生徒」たんとする「私」。そこには、他者「をぢさん」の評価を気にし、小説の素材としておもしろい事を提供できるか否かに自身の価値、自己の存在意義がおかれた「私」が表出している。

さらに、「私」自身がそのことに気づいている様子がどこどこに見受けられる。「やつぱり、つまらない？ どうしたのでせうね。をぢさんにも、わるいところがあるのよ。あたし、ときどき、さう思つて淋しくなります。」「なんだか、みんな自信が無くなつちやつた。」「私は、このごろ、とても気取つて居ります。をぢさんが私のことを、上手に書いて下さつて、私は、日本全国に知られてゐるのですものね。あたしは、寂しいのよ。笑つては、いや。ほんたうよ。」「げびてまゐります。」「もうくだらない自分だけで安心してしまふのですの。」「これらの箇所には、揺れる感情が吐露されている。

手紙の「私」は、自分の日記を素に「をぢさん」が『女生徒』を完成させたことを喜ばしく思う一方で、「寂しい」と言う。「けふも笑わせてあげます」と意気込んだ手紙は、いつの間にか自身によつて、「だめだわね」と否定され、自身を「くだらない自分」だと述べる。手紙の「私」は、『女生徒』に描かれる「女生徒」であり続けようとして、「女生徒」に踏みとどまろうとしつつ、そうすればそうするほど、かつての『女生徒』とは乖離していく自分を感じている。

三 タイトル「俗天使」の意味するもの

作品においてこの手紙の持つ意味を考えてみたい。

冒頭、ミケランジェロの「最後の審判」の写真版を見た事によって、食事を中断させた「私」は、「キリスト」の、手の甲と足の「まっくろい大きい傷口」に、自分の苦悩を重ねているようだ。「私」がもう一つ注目している、「キリスト」に寄り添う「母」＝「聖母」に与えられた言葉は、「若い小さい処女のままの」「初々しく寄り添ひ」「うつむいて、ひっそりしずまり、幽かにもの思いつつ在る」というひそやかなものである。ミケランジェロの「聖母」を「軽々しく、形容してはいけない」「誰にも見せず、永遠にしまつて置きたい思ひ」「無上」とし、「私」にも、陋巷の聖母があった。」と、以下、自身の「聖母」として、挙げられるのは、「支那そばやの女中さん」「丸顔の看護婦さん」「私」が湯治場を去る際見送りにきた「娘さん」である。

「陋巷の聖母」達を表現する「こつそり」「だまつて」「上品」といった言葉は、先のミケランジェロの「聖母」からイメージされた女性達であるが故に、「聖母」を表現している語とイメージが共通している。以後、

もう、種が無くなつた。あとは、捏造するばかりである。何も、もう思ひ出が無いのである。語らうとすれば、捏造するより他はない。だんだん、みじめになつて来る。

ひとつ、手紙でも書いてみよう。

との言葉の後に、手紙が登場する。

くだらなく書いてみたが、あまり面白くなかつたかも知れない。でも、いまのところ、せいぜいこんなところが、私の貧しいマリヤかも知れない。実在かどうかは、言ふまでもない。作者は、いま、理由もなく不気嫌である。

と、作品は閉じられる。

ここで、手紙の「私」は、「貧しいマリヤ」だといえるだろうか。否、私は、手紙の「私」は、「貧しいマリヤ」というより、「俗天使」だったのではないか、と考える。「陋巷の聖母」として挙げられた女性達は、語り手の「私」を、治癒し、世話をし、見守る、許す、といった存在である。彼女達に對峙した時の「私」は、いつでも、恥ずかしさや羞恥を伴う。「私」に、暖かく手を差し伸べ、声をかけ、受け止める女性達は、まさに、自身をキリストと重ね合わせた「私」にとってミケランジェロの「聖母」のような存在なのである。彼女達は、多くの言葉を持たない。対して、手紙の主の「私」は、多くの言葉を持ち、饒舌で、言語化に執着しているかのようだ。「をぢさん」に語りかけながらも、関心の半分は、自身の在り様に向けられており、自己確定に揺らいで、その自己確定のために、語り手の「私」を頼り、必要とする。その点において、「陋巷の聖母」としてあげられる他の女性達とは決定的に異なっている。手紙

の「私」は、「聖母」ではなく作家の俗化を告げる役割を果たし、自らも俗化し俗にある「俗天使」だと、私には思われる。

『女生徒』の題材となる言葉を提供し、『女生徒』成立のきっかけを運び、インスピレーションを与えたという意味では、かつて手紙の「私」は、小説家である「をぢさん」にとつて、「天使」であつたと言えるかも知れない。しかし、今や手紙の「私」、彼女の立つ地平は、全体の語り手の「私」と同じところであり、抱える問題は、語り手の「私」と同じところに陥っている。手紙の「私」は、今、まさに、俗にありながら、自らの俗化を通して、作家の俗化を知らしめる、「俗」を告げる「天使」ではないか。だからこそ、結末の一文で作者が登場し、「不気嫌である」と結ばれるのではないだろうか。

以上の理由で、作品のタイトルが、作中に一言も出てこない「俗天使」であることは、私には至極納得がいく。「貧しいマリヤだろうか」と自問した答えが、「俗天使」であつたのではないか。「俗天使」とは、手紙の「私」を指したものだ、私は考へる。

先に考察してきた手紙の内容を、作品全体から捉えてみると、作品中で、語り手の「私」は、自身を「私は、弱行の男である。私は、御気嫌買ひである。」と述べるが、その「私」に向かつて語りかける、手紙の「私」も手紙の送り手に向かつて「御気嫌買ひ」している。また、手紙の「私」の日常の出来事を列挙しながらも、結局「いい話」を提供出来ず、逡巡する「私」の苦しみは、は「もう書きたくなかつた」が「書かなければならぬ」「種が無くなつた」と作品中で吐露してい

る現在の作者にもふりかかつてこざるをえない。作者を自己内省へ導く必然を持つている。だからこそ、作者は、「理由もなく不気嫌」にならざるをえない。つまり、この手紙の「私」の言説は、書けなくなつた小説家の姿とびつたりと重なるのである。もう小説の題材となるようなことを提供出来ない書けなくなつたことを、書いている手紙の「私」と、小説を「書きたくなかつた」と言いながら、「書かなければなら」ず、書けなくなつたという手紙を小説の題材として書いている語り手の「私」。この作品は、二十世紀型小説の、書けないことを書いている作品で、入れ子式の構造を持つている。

四 「捏造」される手紙

作品に生じるもう一つの問題、手紙を「捏造」だとした点に關して考えてみたい。

海老井英次は、

かくて「私」は「捏造」という方法に身を傾ける。「捏造」とは「本当はない事があるかのように偽つて作り上げること」であり、「事実」や「真実」という概念が確乎としてゐる世界では、もとより否定的な意味合いが強いが、何のことはない、それは小説を書くということの本来的なあり方ではないか。

以下、「ひとつ、手紙でも書いて見よう」とことわつて、「私」の手紙と、読者には予想させた上で、書簡体の文章

太宰治『俗天使』論

が書き連ねられているが、それは実は「おぢさん」と「私」に呼びかけることから始められる「女生徒」の手紙なのである。その書き手が太宰の一年程前の作品「女生徒」(『文学界』昭和一四(一九三九)年四月)の主人公であることは、大方の読者にはわかるはずである。しかしこの手紙は、「私」が自分で「手紙でも書いて見よう」と書き始めたものでありながら、実は作品「女生徒」の主人公からの自分宛のものに化けており、まさに「捏造」そのものである。

〔「聖母」の幻想と「女生徒」の饒舌——「俗天使」試読〕
『太宰治研究5』 和泉書院 平成十年

と論じているが、事実は、全く逆である。考察してきたとおり、この手紙は全くの創作ではなく、実際に送られた有明からの手紙である。その手紙を作者は「捏造」としている。「女生徒」の成立事情を知らない読者は、『女生徒』が素材などなく、ゼロからの創作であるとの前提に立っており、その前提に立っている以上、その「女生徒」の「私」が書いた手紙という形式をとっているこの手紙も、創作であると感じたであろう。

太宰が「捏造」と断つて有明の手紙を引用すること、「実在かどうかは言ふまでもない。」と断つておいて、「実在」している有明の言葉を引用することの意図は、有明の『女生徒』受容から、明らかにしたい。

有明自身は『女生徒』をどう受け容れていたのか。

のちに、また、大へん小柄の母堂が、わざわざ三鷹へお訪ね下さって、『女生徒』に上手に書いて下さって、日本中に広くよまれ、蔭ながら、名誉に、うれしく存じてゐます。」といふ、御言葉であつた。

〔『太宰治全集 第三巻』「月報」筑摩書房 昭和五十年〕

津島美知子のこの言及は、先に述べた、『俗天使』の手紙中の、自分の母親に『女生徒』を読みたいと言われる場面や、先に挙げた「私は、このごろ、とても気取つて居ります。をじさんが私のことを、上手に書いて下さって、私は、日本全国に知られてゐるのですものね。」との表現を想起させる。

太宰に送った自身の日記が素材となり『女生徒』が発表されたことに関して、有明が満足していたことは間違いないだろう。しかし、それ故、有明は『女生徒』のように、その後、自身が作品の素材となろうする意識を持ったのではないか。或いは、確信犯的に同一であろうとしたのかも知れない。ともかく、有明は、自分『女生徒』の「私」と考え、その意識のあまり、『女生徒』に逆に近づいていこう、としていたのではないか。

だからこそ、手紙の主、有明は、何度も確認せずにおれない。他者(小説家太宰)に認められなければ自己確定出来ないのである。有明のアイデンティティは、もはや太宰に「おもしろい」と感じてもらえるかどうかにかかっている。よって、それが叶わないうとき、「自信が無くなつちやつた」「だめな子かも知れませんが」「くだらない自分」「げびてまゐります」と卑下す

る。

そもそも、有明は、日記を何故太宰に送ったのか。有明は、日記執筆当時十九歳、洋裁学校の生徒で、読書家であったことが、日記の記述から伺われる。太宰の愛読者ではあったが、日記中には、太宰や太宰作品に関する記述はない。何故他の作家ではなく太宰に送ったのか、理由は明らかでない。ただ、日記には「これをうんと書いて、安っぽい雑誌でもいい、出る様になればいい、なあー」という記述があり、少なくとも日記を記述する時点で、在る程度他者の目に触れることを意識していたことが伺える。「虚構の彷徨」（昭和十二年）の「著者略歴」の住所を見て送ったとされており、「虚構の彷徨」中の「虚構の春」が書簡を集めた形式になっていることも影響したと思われる。

自身の日記が素材となり、『女生徒』として発表された時、ある意味で、有明の夢は実現したといえるだろう。夢が、現実のものとなり、自分の言葉が、（自身の在り様）が『女生徒』という作品になった。しかし、日記は、太宰によって作品化された時点で、有明の手を離れた。日記が素材となり、ある意味ではモデルとなったとは言えても、有明淑^{（註5）}『女生徒』の「私」ではない。彼女の、『女生徒』の「私」であり続けようとする試みは、到底実現不可能な試みである。喜びの一方で、とまどう姿。この手紙には、有明淑の複雑な心境が表れている。この有明の、『女生徒』であり続けよう意識した瞬間に壊れてしまふ、『女生徒』ではもはやなくなってしまうという点は、小説の中に自意識が入り込んで、小説自体が、壊れてしまったの

が、二十世紀小説であるという意味でも、作品の構造と重なっている。書けないことを書いている作者の言説と重なり、有明淑の言葉は、再び作品として、取り入れられることとなったと考えられる。そして、また、この手紙も日記同様、書き手有明の手を離れ、作品となる過程で「捏造」＝創作となる。

おわりに

以上、考察の結果、手紙部分に関して、例えば、関谷一郎が、『女生徒』を論じた中で、『俗天使』に対する言及、

「俗天使」の女学生は、形の上では「女生徒」と直結しているように見えるが、苦しまぎれの蛇足というほかない。

（『女生徒』試読 『解釈と鑑賞』至文堂 昭和六十二年）

との見解には肯けない。『俗天使』の手紙部分は、「蛇足」ではなく、二十世紀小説の方法、メタフィクションの問題に触れており、また、タイトルの「俗天使」に大きく関わっている。

また、『俗天使』は、女性の一人称独白体の作品群の中でどのように位置づけられるか。根岸泰子は、

後の「千代女」が「書けなくなった女学生」を扱っているのには、『女生徒』の発表が有明家の人々に与えた影響も関係しているかも知れない。

（『女生徒』——可憐で、魅力があり、少しは高貴でもある少

太宰治『俗天使』論

女」「國文學 解釈と教材の研究」學燈社 平成十一年)

と指摘している。『女生徒』発表後の有明の言葉が取り入れられた『俗天使』は、手紙部分に見られる「私」の不安定さと、自意識の問題、他者の評価に自己確定を委ね、成就されなかった時、自身を「だめな子」とする、書けなくなつた少女の言説という意味において『女生徒』から『千代女』の間に位置する作品といえる。また、他者によつてはじめて自己確定できるという点では、『待つ』の主要なモチーフとなつていくと私は捉えている。この点においても、『俗天使』の手紙部分は、決して「蛇足」ではなく、『俗天使』は、以降、太宰の中期、女性の一人称独白体の作品に影響を与えている重要な作品である。

註記

註1 「資料集 第一輯 有明淑の日記」(青森県近代文学館協会 平成十二年)

本稿中の有明日記に関する言及は、全てこの資料集に拠っている。

註2 『太宰治の「女生徒」と有明淑の日記』「資料集 第一輯 有明淑の日記」(青森県近代文学館協会 平成十二年)

註3 当時、有明淑は練馬に住んでいたため、津軽地方の方言を知る機会は大宰からと考えてもよいと思われる。大宰と有明の交流については、津島美知子『増補改訂版 回想の大

宰治』(人文書院 平成九年)に詳しい。

註4 有明日記中に登場する作品は、志賀直哉『暗夜行路』川端

康成『雪國』永井荷風『つゆのあとさき』『澤東綺譚』岡本かの子『やがて五月に』『母子叙情』アミール『クオレ』など、約三十である。

註5 津島美知子『回想の大宰治』人文書院 昭和五十三年

註6 「資料集 第一輯 有明淑の日記」に拠る。日記の冒頭、第一目目にあたる、四月三十日の記述にある。日記執筆は昭和十三年、私見では、当時の綴り方教育、豊田正子の『綴り方教室』の影響があると思われる。

付記 資料の引用に際しては、旧字は適宜新字体に改めた。なお

『俗天使』の引用は、『太宰治全集 第三巻』(筑摩書房 平成元年)に拠った。

(さくらだ としこ・博士課程一年)